

平成30年9月10日現在

機関番号：32508

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370356

研究課題名(和文) アルベール・カミュ研究 - 「暴力」に抗する文学と思想

研究課題名(英文) Albert Camus Research, Literature and Thought against violence

研究代表者

三野 博司 (MINO, HIROSHI)

放送大学・奈良学習センター・特任教授

研究者番号：90117979

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：アルベール・カミュは、二つの世界大戦をもたらした激動の時代である20世紀を生き、彼は、人間を襲う暴力的なるもの(病気、死、災禍、テロ、戦争、全体主義)に対抗して、一貫して超越的価値(キリスト教や左翼革命思想)を拒否し、人間の地平にとどまって生の意味を探し求めた。この観点から、カミュが生きた時代状況をつぶさに検討し、作家の全作品を読み直し、その特性を明らかにした。その成果は、2016年6月に刊行した単著『カミュを読む 評伝と全作品』、日本語およびフランス語によって研究誌に発表した論文として結実した。

研究成果の概要(英文)：Albert Camus lived in the twentieth century, a turbulent time marked by the two world wars. In his fight against violence (illness, death, catastrophe, terrorism, war, totalitarianism), he refused transcendental values (Christianity and revolutionary ideas), and remaining on the human horizon he pursued the meaning of life. From this point of view, I examined the situation of the time he was alive, and re-examined all of Camus's works to clarify their characteristics. As a result, I published a book titled "Camus Reading - His Life and All Works" in June 2016, and articles in Japanese and French in academic journals.

研究分野：フランス文学

キーワード：暴力 不条理 反抗

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者は、平成 21 (2009) 年 平成 24 (2012) 年、科研費を受けて、カミュの処女作『幸福な死』と遺作『最初の人間』を対象に研究を進めた。今回は、さらに対象を大きく広げて、カミュの全作品の読み直しを通じ、激動の 20 世紀を生きた作家が、時代の暴力的状況とどのように対峙したのかを明らかにするための研究を開始した。

(2) 「21 世紀のカミュー没後 50 年」(『流域』第 67 号、青山社、2010) において申請者が紹介したように、フランスでは近年哲学者としてのカミュの再評価が盛んである。カミュ自身は結核のため大学教授資格試験の受験を断念し、学術的な訓練を受けていない。だが、そうした非アカデミックなカミュの哲学を評価する人々が増えている。こうした背景のもとで、カミュの思想の再検討をはかり、その今日的意義を確認したいと考える。

(3) 申請者は、2013 年 3 月『大学の現場で震災を考える』(かもがわ出版) を編集し、そこに「震災とフランス文学」と題した小論文を発表した。また、パリで刊行されている『カイエ・レルヌ』『カミュ特集』(2013 年) の編集者ゲイ＝クロジエから寄稿依頼を受けて、『『ペスト』とアレゴリーの力』(仏文) を脱稿した。これは東日本大震災以後、カミュの『ペスト』が読み直されている状況を受けて、3・11 の視点から今一度作品を読み直し、そこにおけるアレゴリーの力を再評価しようとするものである。『ペスト』で提示されたのは人間を襲う疫病、戦争、災禍に対して、どのようなモラルが成り立つのかという問いであった。これは『ペスト』だけでなく、カミュのすべての作品に通底する主題でもあり、この観点から全作品の再検討をはかる。

(4) 申請者は、カミュの全作品を、「暴力的なるもの」との戦いとしてとらえて論じる単著『カミュを読む 評伝と全作品』を企画中であり、出版社の編集者とも協議を続けている。カミュの生涯を追いながら、全作品を詳細かつ的確に論評して、作品世界の全体像を明らかにする予定である。

2. 研究の目的

(1) カミュの全作品を対象に、作家が生涯を通じて追求した主題である「人間はいかにして暴力的なるものに抗することができるのか」を研究する。

二つの世界大戦を初めとする激動の時代であった 20 世紀を生きたカミュは、人間を襲う暴力的なるもの(病気、死、災禍、テロ、戦争、全体主義)に対して、一貫して上位審級(キリスト教や左翼革命思想)を拒否し、人間の地平にとどまって生の意味を探しもとめた。この観点から今一度カミュの全作品を読み直し、彼が生きた時代状況をつぶさに検討し、その特性を明らかにする。

(2) 「意味」を見失った時代にあつて、カミュは人間のなかにこそ意味のある何かを存

在すると信じた。こうしたヒューマニズムは、ポストモダンの時代や繁栄に浮かれた時代には旧弊なものとも見えたかもしれない。しかし、3・11(東日本大震災)以後の日本において、多くの人々が『ペスト』を読み、あるいは再読して、そこに真にリアルなものを感じとったように、混迷の今こそ、カミュの文学と思想が輝きをもつだろう。

(3) カミュは世界の不条理を見据えつつ、「父」の名による裁きに反抗するとともに「母」の象徴を擁護して、「ここ」より他の場所「いま」より他の時間を拒否し、超越性なき世界を生きる叡智と歓喜を追求した。いかなる超越的原理も失墜した 21 世紀にあつては、「ここ」と「いま」を生きる人間的尺度のモラルこそが求められているだろう。

(4) カミュが生きた 20 世紀(1960 年まで)は二つの世界大戦、ファシズム、植民地独立戦争、全体主義とテロなど、文字通り激動の時代であった。他方で、20 世紀後半そして 21 世紀は、世界戦争こそ知らない時代であったが、局地戦争やテロリズムをはじめとして、環境破壊やグローバル規模での経済危機など、人間をとりまく「暴力」的なものは姿を変えて存在し続けている。今こそカミュの再検討、再評価が必要であると考えられる。

3. 研究の方法

「暴力に抗する文学と思想」の主題のもとにカミュの全作品の読み直しをはかった。『手帖』において、カミュはみずからの作品の系列化を何度か試みている。第 1 の系列は「不条理」をテーマとし、ここには『異邦人』『シーシュポスの神話』『カリギュラ』が含まれる。第 2 の系列は「反抗」をテーマとし、『ペスト』『反抗的人間』『正義の人々』が含まれる。そして第 3 の系列は「愛」をテーマとするものだったが、『最初の人間』が未完のまま残された。これらの作品を含む全作品を、作家が生きた時代状況を見据えつつ再検討した。

まず第 1 の系列において、暴力的なるものは世界の「不条理」としてあらわれた。17 歳のカミュを襲った結核の発病。それが彼をつねに死と向き合わせることになる。第 2 の系列の作品は、第二次大戦におけるナチズムとの対決から生まれた。この不合理な暴力に対して、集団の連帯によって「反抗」することが提示される。最後の第 3 の系列では、「愛」が主題となり、暴力的なるものを超越する次元が模索される。カミュは、左翼全体思想や歴史主義との対決のなかで、政治思想を越える倫理を探求した。

さらに、カミュが生きた時代を歴史的に検証した。具体的には、第一次世界大戦、ファシズム、第二次世界大戦、左翼全体主義、アルジェリア戦争を、文学・思想との関係において考察した。

以下、年度ごとに記す。

(1) 平成 25 (2013) 年度

① 単著『カミュを読む 評伝と全作品』の執筆作業を続けた。特に第 1 の系列、不条理の作品群の読み直しをはかり、若きカミュが世界の不条理を体験すると同時に、とりわけ地中海の美のなかに救済を見いだす、その過程を明らかにした。8 月、科研費によりフランスへ出張し、調査活動および研究者との情報交換を行った。8 月 17 日-24 日、フランスのスリジー・ラサルで開催されたカミュ国際学会において、シンポジウム「カミュと日本、日本とカミュ」のパネラーとして発表を行った。特に、2011 年 3 月「フクシマ」の出来事と小説『ペスト』の関わりについて論究を行った。11 月、科研費によりフランスおよびアルジェリアへ出張し、調査活動および研究者との情報交換を行った。11 月 3 日、アルジェリアのモスタガネム大学において、『ペスト』を主題に講演を行い、聴衆の学生たちと意見を交わした。6 月および 12 月に日本カミュ研究会代表として 2 回の研究会を主催し、参加者たちと情報交換・意見交換を行った。

(2) 平成 26 (2014) 年度

① 単著『カミュを読む 評伝と全作品』の執筆作業を続けた。第 2 の系列、「反抗」の作品群の読み直しをはかり、第二次世界大戦、レジスタンス、戦後の対独協力派粛清などを経て、「殺人」の主題がカミュの作品において重要な意味をもつに至る、その過程を明らかにした。10 月 3 日、パリ第 4 大学において開催された博士論文公開審査に審査員として招かれ、この機会に審査員の研究者と意見交換を行った。11 月、科研費によりフランスへ出張し、パリ第 3 大学において開催された国際カミュ学会理事会に出席して複数のカミュ研究者と情報交換を行い、また国立図書館において調査活動を行った。6 月および 12 月、日本カミュ研究会代表として 2 回の研究会を主催し、参加者たちと情報・意見交換を行った。

(3) 平成 27 (2015) 年度

① 単著『カミュを読む 評伝と全作品』の執筆作業を続けた。第 2 の系列以降、第 3 の系列へと至る過程の作品群、そして『最初の人間』を精細に論じた。とりわけ「愛」の主題が、この遺作において、今後どのように展開していくのかについての見通しを提示した。9 月、科研費によりフランスへ出張し、パリおよびエクサン＝プロヴァンスのメジャーヌ図書館、さらにはルールマランのカトリーヌ・カミュ氏宅において、『最初の人間』の草稿に関する、調査活動を行った。また、パリにおいて、カミュ研究者たちとの意見交換を行った。11 月、科研費による二度目のフランスへ出張を行った。パリにおいて国際カミュ学会理事会に出席しヨーロッパ各国の研究者と情報交換を行い、さらにパリ国立図書館等において調査活動に従事した。5 月および 12 月、日本カミュ研究会代表とし

て 2 回の研究会を主催し、参加者たち意見交換を行った。また 12 月 19 日の例会では、暴力の一つの現われである殺人を主題として、「カミュにおける殺人と潔白」と題した研究発表を行った。

(4) 平成 28 (2016) 年度

① 単著『カミュを読む 評伝と全作品』を完成、出版したあと、「暴力に抗する文学と思想」の主題をさらに発展させるための、個別論文の準備にとりかった。9 月に、科研費によるフランスへの出張を行った。各地の図書館においてカミュ関連資料調査を行うとともに、旧知のカミュ研究者と意見交換を行った。10 月科研費による二度目の出張を行い、資料調査に従事した。とりわけ、10 月 20 日、21 日、フランスのアンジェ大学で開催された国際学会の学術委員を務め、司会を分担した。世界中から集ったカミュ研究者と貴重な情報交換や意見交換を行い、カミュ研究の現況についての知見を得た。特に、暴力に対抗しうる「反復の意志」を分析し、カミュと日本の哲学者である九鬼周造との比較研究である " Sisyphé ou l'esprit du boushido - Camus et Shuzo Kuki" を発表した。5 月および 12 月、日本カミュ研究会代表として 2 回の研究会を主催し、参加者と意見交換を行った。

(5) 平成 29 (2017) 年度

① 昨年刊行した単著『カミュを読む 評伝と全作品』において扱った「暴力」の主題をさらに補完、発展させるための論文の執筆作業を続けた。とりわけ、これまで扱ったことのない新たな主題である「ポエジー」を、殺人や愛との主題と関連付けて追及した。9 月、科研費によりフランスへ出張し、パリ国立図書館等において調査活動を行い、カミュ研究者（国際カミュ学会会長スピケル氏、同副会長プロンドー氏、パリ第 3 大学名誉教授レイ氏）と情報交換を行った。11 月、科研費による二度目のフランスへ出張を行った。エクサン＝プロヴァンスにおいて「カミュと微笑み」と題した国際カミュ学会に出席し、参加者と情報交換および意見交換を行った。さらにパリにおいて調査活動に従事した。6 月および 12 月、日本カミュ研究会代表として 2 回の研究会を主催し、参加者と意見交換を行った。

4. 研究成果

400 頁を越える『カミュを読む 評伝と全作品』（大修館書店）を 2016 年 6 月に刊行した。カミュの生涯を追いながら、その全作品を、暴力的なるものとの戦いの視点から、詳細に分析、解説した。その他にも、関連した主題について、個別の論文を日本語およびフランス語で研究会や学会で発表したり、出版物に発表した。

以下、年度ごとに記す。

(1) 平成 25 (2013) 年度

① 6月 Philippe Vanney との共編により『カミュ研究 Études camusiennes』第11号(カミュ生誕100年記念号)を編集・発行した。また同号に伊藤直との共著により「日本におけるカミュ受容」(日本語およびフランス語)を発表した。論文「『ペスト』アレゴリーの力」を、『Études camusiennes カミュ研究』第11号に発表した。7月、世界の第一線のカミュ研究者の寄稿による Cahier Herne に論文 « La Peste, la force de l'alégorie » を発表した。

(2)平成26(2014)年度

① カミュの全作品を対象にして、そこに現れる墓地の持つ意味を、死者に対する記憶と忘却の視点から分析した論文「カミュにおける 墓地 記憶と忘却」を執筆した。2月に刊行された Camus, l'artist, Colloque de Cerisy に、仏語論文 « Comment les Japonais ont-ils rencontré Camus » を発表した。

(3)平成27(2015)年度

① Philippe Vanney との共編により『カミュ研究 Études camusiennes』第12号を編集し、5月に刊行した。論文「カミュにおける〈墓地〉——記憶と忘却」を同号に発表した。丸善 PR 誌『學燈』からの寄稿依頼により、カミュにおける〈反復〉の持つ意味を暴力に抗する倫理の観点から分析した論文「繰り返されるもの - カミュとシーシュポス」を執筆し、『學燈』2015年(平成27年)夏号に発表した。仏語論文 « Comment les Japonais ont-ils rencontré Camus » を、Camus l'artist Colloque de Cerisy, Presses universitaires de Rennes に発表した。

(4)平成28(2016)年度

① 「死」の主題と関わって、個別テーマである「墓地」を取り上げて分析した論文 "Le Cimetière chez Camus ; mémoire et oubli " を、国際研究誌 Présence d'Albert Camus 第8号に発表した。暴力の一形態である「殺人」を主題とした論文「カミュにおける殺人と潔白」を、放送大学研究年報、第34号に発表した。論文 « Sisyphé ou l'esprit du bushido - Camus et Shuzo Kuki » を執筆し、10月にフランスのアンジェ大学で開催される国際カミュ学会 « Albert Camus, les vertiges du sacré » において発表した。

(5)平成29(2017)年度

① Philippe Vanney との共編により『カミュ研究 Études camusiennes』第13号を編集し、5月に刊行した。論文「シーシュポスと武士道—カミュと九鬼周造」を同号に発表した。平成30年10月にフランスのアルケスナンで開催される国際カミュ学会 “ Albert Camus et la Poésie ” において発表するための原稿 “ La Poésie chez Camus - pierre, meurtre, amour ” を執筆した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

① 三野博司、「シーシュポスあるいは武士道の精神—カミュと九鬼周造」、Études camusiennes カミュ研究 査読有 第13号、青山社、2017、p.1-12.

三野博司、「カミュにおける殺人と潔白」、放送大学研究年報、査読無、第34号、放送大学、2016、p.125-36.

Hiroshi Mino、「Le Cimetière chez Camus », Présence d'Albert Camus, 査読有、No 8, Société des Études camusiennes, 2016、p. 48-66.

三野博司、「カミュにおける「墓地」—記憶と忘却」、Études camusiennes カミュ研究 査読有 第12号、青山社、2015、p.39-59.

三野博司、「繰り返されるもの - カミュとシーシュポス」、學燈、第112巻第3号、丸善、2015、p. 6-9.

Hiroshi Mino、「La Peste à Fukushima », Albert Camus La Pensée révoltée, Philosophie Magazine, 査読有、2013、p.92-94.

三野博司、伊藤直、「日本におけるカミュ受容」、Études camusiennes カミュ研究 査読有、第11号、青山社、2013、p.79-90.

三野博司、「『ペスト』アレゴリーの力」、Études camusiennes カミュ研究 査読有、第11号、青山社、2013、p.10-18.

〔学会発表〕(計4件)

Hiroshi Mino、「Sisyphé ou l'esprit du Bushido - Camus et Shuzo Kuki », Albert Camus et les vertiges du sacré, 2016年10月22日、Université catholique d'Oueste, France.

三野博司、「カミュにおける殺人と潔白」、日本カミュ研究会第61回例会、2015年12月19日、キャンパスプラザ京都

三野博司、「カミュにおける墓地—記憶と忘却」、日本カミュ研究会第59回例会、2014年12月20日、キャンパスプラザ京都

Hiroshi Mino、「Comment les Japonais ont-ils rencontré Albert Camus », 2013年8月24日、Colloque de Cerisy, France.

〔図書〕(計3件)

① 三野博司、大修館書店、『カミュを読む—評伝と全作品』2016年、p.1-420.

Hiroshi Mino、「Comment les Japonais ont-ils rencontré Camus », Camus l'artist Colloque de Cerisy, Presses universitaires de Rennes, France, 2015、p. 293-9.

Hiroshi Mino、「La Peste : La Force de l'allégorie », L'Herne Camus, Les Cahiers de L'Herne, France, 2013、p.258-262.

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称 :

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

三野博司 (MINO HIROSHI)
放送大学・奈良学習センター・特任教授
研究者番号：90117979

(2)研究分担者

()
研究者番号：

(3)連携研究者

()
研究者番号：

(4)研究協力者

()